2025年度

J r H 小 論 文

注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
3. この問題冊子は4頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、下記の問に答えなさい。解答は解答用紙の所定欄に記しなさい。

観光旅行でハワイへいった。ワイキキで遊んだ。

真昼の空には、常夏の太陽がきらめいている。耳をすますと、貿易風がかきなでてゆくココヤシの葉ずれの音が聞こえてくる。日差しは強いが、空気は思ったより乾燥していて涼しく、日陰に入るとさっきまで吹き出していた汗が、みるみる乾いていく。

たそがれ時に、ワイキキのはずれのカピオラニ・パークを歩けば、夕映えのダイヤモンド・ヘッドの荘厳さに息を呑むことだろう。空は、血のように燃えるオレンジ色から、深い紫色へとすこしずつ無段階に変化をとげてゆく。南の空にあざやかに輝いているのは、人工衛星だろうか。澄みきった空気のために、矢を放てば、射落とすこともできるかと思えるほどだ。

開放的な雰囲気につつまれて、人々もこころなしかゆっくりと歩を運び、過ぎていくけだるい南国の時間をいとおしんでいるかのようだ。

しかし、この風景はどこかで見たことがある。そう、観光ポスターや旅行ジャーナリズムで何度となく繰り返された「太平洋の楽園」のシーンは、まるで既視現象（デジャビュ）のような錯覚に人を陥らせる。

こんなハワイを期待して、多くの人々がハワイを訪れる。日本からも、毎年おびただしい数の観光客がハワイを訪問するという。

旅行業に携わる人々にとって、ハワイは米櫃こめびつだそうである。不況になって、海外旅行一般が落ち込んでも、ハワイは別格。安定した旅行客を確保できるのだそうだ。

たしかにハワイを訪問する日本人は増えた。1ドルが200円を超していた時代にハワイで生活していたころの私には想像もできなかったほど、たくさんの日本人がハワイに出かけ、また、長期滞在するようになった。

年末年始をハワイで過ごす芸能人のニュースが、マスコミの定番化した季節ネタになるようになった。芸能人に限らず、ちょっとした余暇を見つけてはハワイを訪れる人も増えた。なかには、ハブル華やかなりし時代に、投資目当てにワイキキ周辺にコンドミニアムを買った人や、ゴルフ場つきリゾートの会員権を買った人もいるだろう。

ほかにも、短期の語学留学から、大学院で学位をめざす本格的な留学まで、ハワイに留学する学生の数も非常に増えた。

ワイキキには、そんな日本人を相手にする、日本人経営の目にとび出るような高級品店やレストランが出現し、けっこう繁盛している。そればかりでなく、日本人向けに、日本語専門のレンタルビデオ店や日本語書籍を扱う書店の数も増えた。

かつて、ハワイの日本商店といえば、地元日系人相手の店と相場が決まっていた。しかし、今日、状況は様変わりしている。日本からの多くの訪問者のおかげで、ハワイは、日本人が外国に来たと身構えることなく、日本的な食事をし、日本語のメディアに接し、日本的な消費生活ができるところになりつつある。

一方、ハワイにたくさんの人々が訪れるようになるにつれ、観光ガイドブックやパンフレットがかきたてている南国の楽園としてのハワイのイメージと、実際のハワイ旅行で体験したハワイとにずいぶんと差があることに、日本人は、気がつくようになった。

ダイヤモンド・ヘッドを背景にした高層のホテル群は隣接しすぎて、窓をあければ隣のホテルの壁が見える。街には、車があふれ、ややいかかわしい物売りがたむろし、若い日本人女性とみれば、声をかけてくる。

ワイキキのビーチにでて、打ち寄せる波に身をあずけると、日焼け止めのクリームに含まれるココナツ・オイルの臭いがうっすらと漂ってくる。白く白濁した海水。肢体を惜しげなくさらして寝そべるビキニの女性の背中では、急激に太陽に身をさらしたため、ほとんど第一度の火傷をわずらっている。喧噪と雑踏のワイキキ・ビーチ。

どうも、違うなと思う。でも、ハワイに来たんだと自分を納得させる。

最近では、こんな体験は、旅行慣れた人々の間で、すでに旧聞に属するものとなっているようである。耳ざとい日本のメディアは、「ワイキキはもう俗化した。二度目のハワイはオアフ島脱出だ。そう、マウイ島。いや、カウアイ島だ」と人々に新たな穴場を教えてくれる。

たしかにそうかもしれない。ワイキキは俗化した。それに比べて、マウイ島やカウアイ島には、まだまだ本来の太平洋の島の風景が残されている。

しかし、そんなかけ声に応じてマウイ島やカウアイ島へ渡っても、そこで旅行者を待ち受けているのは、どこかでみたようなリゾート・ホテル。流れ作業のように効率的にスケジュール化されたオプション・ツアーや無国籍のトロピカル・ディナーといったリゾート・ライフである。

そんなこんなで、人々は、うっすらとした失望感をいだきながらも、こう思い直すのだ。

「まあ、こんなもんだらう。これはこれでけっこうじゃないか」と。

海外旅行に慣れた人ほどそう感じている。あたかも、それが旅行慣れたことの証明であるかのように……。ある種のあきらめと奇妙な納得。

こんなもんだらうと思っているハワイ。

しかし、ちょっと待ってほしい。そんなハワイは、観光用に脚色されたハワイのほんの一部の風景なのではないのか。ワイキキの向こう側にあるハワイを、私たちはまだ知らない

いのではないか。

私たちは、観光用のガイドブックが提供する情報や、ホノルル空港に到着したあとホテルにチェックインするまでの時間に、寝ぼけまなこのまま連れ回される観光バスのなかでガイドの口からほとぼしる流暢な解説以上について知ってはいないし、知る必要も感じてこなかったのである。

私たちはハワイについてどれほどの理解をもっているのだろうか。その歴史、社会、風土についてどれほど理解しようとしてきたのだろうか。

(山中速人『ハワイ』による)

問.

観光旅行に関する著者の考えを簡潔にまとめなさい。また、それに対するあなたの考えを述べなさい (合計800字以内)。